

業を熱心に推進している自治体、福祉活動を行っているNPO、住民参加を推進するため自治体が設立した「総合人生大学」の事務局などである。

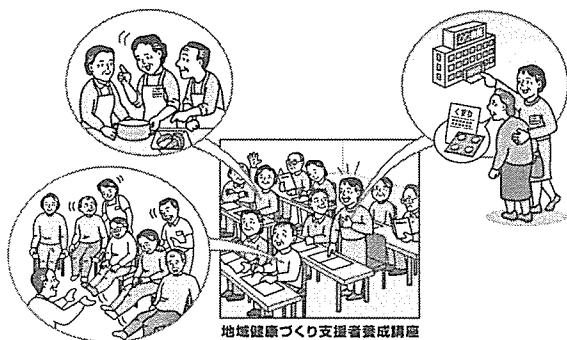
### 先進地への視察研修



## 7. 自主活動化

支援者（ボランティア）自身による「地域健康教室」が開催されるようになった。これは支援者として数年にわたり高齢者の健康づくりに必要な知識や実技を身につけてきた経験や、「さわやか健康教室」を共同開催してきた自信に裏づけされ、実施が可能となったものといえる。町側は会場の確保や資材（マットやボールなど体づくりに必要な器具）の提供といった側面から支援している。参加者（一人暮らしや身体的にやや虚弱な高齢者）は回を追うごとに増えており、さらにニヶ所目をオープンすべく準備中である。

### ボランティア活動の広がり



## II. ポピュレーションアプローチ

### 8. 社会活動性調査（ベースライン調査）

55～79歳の住民のうち1/3の割合で無作為に抽出された標本を対象に、橋本らの「社会活動性指標」を用いた郵送式質問紙調査を行った。得られたデータを活用して同町の中老年者の「社会活動性」にかかわる課題を整理し、それを対象者に還元した。これを通じて住民に地域参加の重要性を認識してもらい、地域共生意識を芽生えさせることをねらった。また、こうした調査を行うことで住民が自治体側は本気で取り組んでいると認識することにもつながるであろう。

### 9. 講演会の開催

一般住民に対する意識啓発の機会として重要であり、本研究ではほぼ一年に一回の頻度で開催した。各回とも盛況でそれぞれ100人から120人の参加があった。支援者（ボランティア）には住民への参加の呼びかけや運営に協力してもらった。

### 10. シンポジウムの開催

シンポジストとして支援者（ボランティア）、他自治体で高齢者保健を担当する行政保健師、さらに主任研究者らが加わり、地域参加をテーマにシンポジウムを開催した。

### 11. 社会活動性調査（追跡調査）

第一回調査の対象者に新たに55歳以上となった人を加えた標本を対象に、ベースライン調査から2年後および5年後の追跡調査を実施した。これら調査データを活用して、介入事業のアウトカム評価と、社会活動性の変化にかかわる関連要因およびソーシャルネットワークのパターンなどを分析した。得られた結果は対象者に還元し、これを通じて住民に地域参加の重要性を再認識してもらった。

## 学校教育への高齢者の社会参加・社会貢献を促す介入プログラム

本研究期間における“REPRINTS”プログラムの経過は以下の通りである（図1）。

図1.“REPRINTS”プログラムの経過

年	月	イベント	ボランティア連絡会議		研究班事務局	協力行政機関	講師・コーディネーター	ボランティア
			月例全体会議	世話人・役員会議	都老研・社会参加とヘルスプロモーション研究チームら	教育委員会、保健センター等を通じ、	図書館司書、地元読み聞かせボランティア、心理・ソーシャルワーカー	
2004	2~4	【第0段階】関係機関との体制づくり調整			教育委員会、保健	センター等を通じ、	講師・受入校との交渉	
	5	【第1段階】啓発講演会・公募						
	6							
	7	【第2段階】養成研修 1)基礎編 ← 2)実践編 ←						
	8							
	9							
	10	【第3段階】試験導入						
	11	【第4段階】読み聞かせ活動					講師はコーディネーターや相談役としても読み聞かせ活動に関与	
2005	1							第二期ボランティア追加
2006	1							
	5	【第5段階】自主運営化戦略			1)自主運営化を要請 2)自主化に向けてのプレレストーミング			第三期ボランティア追加
	6							
	7							
	8							3)世話人会設置
	9							役員ボランティア互選
	10	【第6段階】他地域への普及・展開戦略						ボランティア規約を審議
2007	1							
	2							
	3							
	5							第一回ボランティア総会開催

【第1段階】啓発講演会・公募：2004年5月末～7月初、3地域毎に地元の公民館、保健センターにおいて絵本・児童図書専門家による基調講演と当研究事業全体の説明をプログラムとしたボランティア募集イベントを開催した。市区報、回覧版等による一般公募で上記イベントに集まった60歳以上の受講者のうち、76人が引き続きボランティア養成セミナーの受講を希望した。

【第2段階】：ボランティア養成研修  
2004年7月から3ヶ月間(週1回2時間)のボランティア養成研修を開講した。1)基礎編：内容は絵本・児童図書専門家、公立図書館司書や当該地域で先駆的に「読み聞かせ」活動を行っているインストラクターに

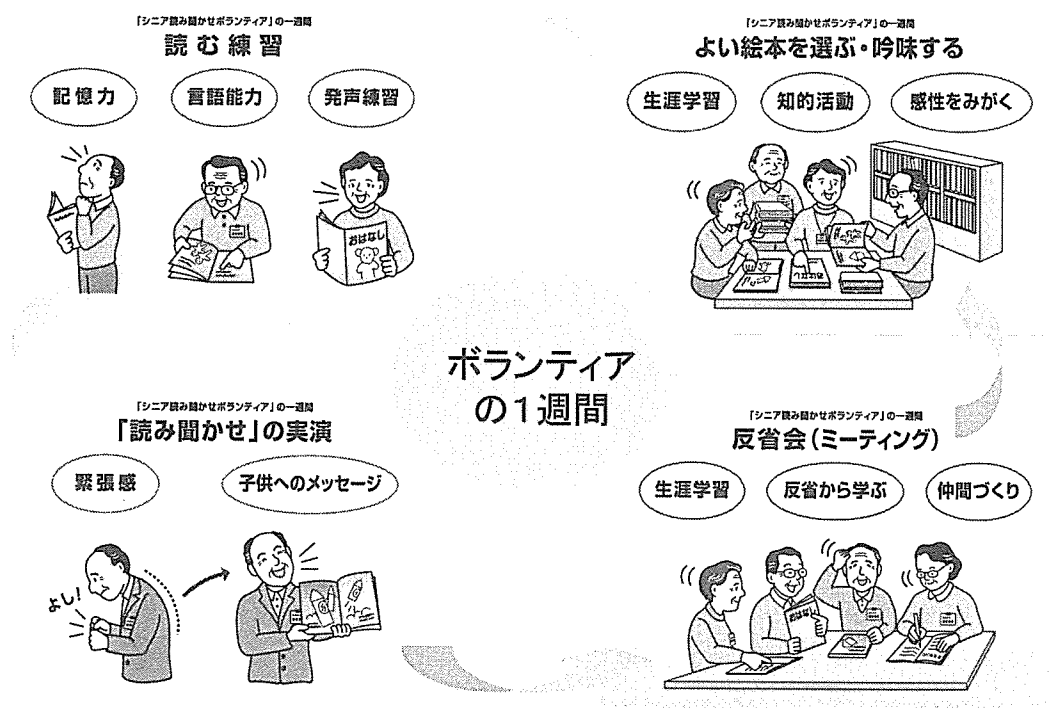
よる「絵本に関する知識・読み聞かせの実技」、社会福祉協議会職員等による「ボランティア論」、保健師、都老研スタッフによる「高齢期の健康づくり」と多様なカリキュラムとした。2)実践編：同セミナー後半から、活動を予定している施設への見学や教職員等による「学校教育の現状」、「地域における子育て事情」、「学校ボランティアの心得」を教授した。住居地域別・活動施設別に6～10人単位のグループワークに移行し、読み聞かせのプログラムの考案や実践練習に入った。

【第4段階】読み聞かせ活動：【第2段階】に形成された自主グループを単位として、10月以降、順次、受け入れ施設への訪問・

交流活動を開始した。計 6 小学校, 3 幼稚園, 6 学童クラブ (児童館) を 1~2 週間に 1 度程度訪問した。訪問活動の事前には,

準備(選書, 音読練習, リハーサル), 事後には反省会を設けた (図 2)。

図 2. 「読み聞かせ」ボランティア活動のサイクル



〔読み聞かせの活動・実演例〕 各幼稚園, 学校, 児童館のカリキュラム等の事情により活動の形態は異なるが, 概ね以下の通りである。

- 1) 幼稚園の場合: 園児 1 クラス(20 人程度)を前に実演し, グループ全体で約 30 分担当し, 手遊びの後, 一人 1 冊ずつ計 3,4 冊読み聞かせる。
- 2) 小学校の場合: 「朝読書の時間 (8:30~8:45)」が設けられており, ボランティア 1 人が 1 クラスを受け持ち 1~2 冊の絵本を読み聞かせる。また, 図書室にて図書の貸出し・整理や, 中休みや昼休み (20~30 分) に希望する児童に対して読み聞かせを行な

う場合もある。

- 3) 児童館・放課後学童クラブの場合: 「読み聞かせ」を 30 分程度行った後, ゲーム等を用いて児童の遊び相手となり自由に交流する。

〔反省会・ミーティング・準備〕 施設での「読み聞かせ」による交流活動の前後には, 子供の反応や絵本の内容・読み方等についての意見交換, 活動計画, 予行練習のための小ミーティングがグループ単位で開かれた。

また, 1 ヶ月毎に地域別に全ボランティアを対象に連絡会議を開き, 他のグループや

当研究チーム、行政担当者との情報交換を行うとともに、「読み聞かせ」等の知識や技術をさらに向上させるためインストラクターによるアドバンス研修をおこなっている。

いて、ボランティアの育成を支援した（主催：同区を拠点とする NPO 法人，協力：当研究班，杉並区）。当研究班は同年 10 月から養成研修のプログラム提供や講師派遣を行なった。

【第 5 段階】 自主運営化戦略：

1) 【4】以降，活動施設やコーディネーターとの連絡・調整はボランティアグループが主体的におこなってきたが，他施設を担当するボランティアや協力行政機関との連携やボランティア連絡会議の企画・運営は主に研究班事務局が担ってきた。本研究終了（2007 年 3 月）後に，“REPRINTS”プログラムが各地域において定着・継続するために，現ボランティアに対して，完全自主運営化を促した。

2) 三地域ごとに連絡会議においてボランティアと研究班事務局や行政担当者，講師・コーディネーターらにより自主運営化に向けた“REPRINTS”ボランティア活動のあり方についてブレインストーミングを繰り返した。

3) 上記，2)の結果，三地域ともに，それぞれ①ボランティアメンバーの役割分担や組織体制の整備，および②ボランティアの会則の制定，が急務とされ，地域ごとに世話人ボランティアによる作業部会が結成され，①②が完成した。

【第 6 段階】 他地域への普及・展開戦略：

“REPRINTS”プログラムを他地域へ展開することを目的に，平成 19 年 5 月より同プログラムの導入を希望していた，杉並区にお

## Ⅱ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

<雑誌>

著者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他	シニアボランティアとの交流が児童の高齢者イメージに及ぼす影響—世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム”REPRINTS”より	日本公衆衛生雑誌		(投稿中)	
渡辺直紀, 吉田裕人, 藤原佳典, 他	要介護化リスクを有する地域高齢者のスクリーニングに関する研究	日本公衆衛生雑誌		(投稿中)	
吉田裕人, 藤原佳典, 天野秀紀, 他	介護予防事業の経済的側面からの評価 —介護予防事業参加群と非参加群の医療・介護費用の推移分析—	日本公衆衛生雑誌	54 (4)	148-159	2007
新開省二	地域保健の現場から-2006年の介護保険制度改正を受けて高齢者地域保健現場はどのように変わったか—	Geriatric Medicine (老年医学)	45 (2)	117-121	2007
藤原佳典	団塊の世代の退職による地域保健活動への影響 2007年, 黒船来航か?	保健師ジャーナル	63 (2)	108-113	2007
藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他	都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム —“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果—	日本公衆衛生雑誌	53 (10)	702-712	2006
菅万理, 吉田裕人, 藤原佳典, 他	縦断的データから見た介護予防健診受診・非受診の要因	日本公衆衛生雑誌	53 (10)	688-701	2006
田中千晶, 吉田裕人, 藤原佳典, 他	地域高齢者における身体活動量と身体・心理・社会的変数との関連	日本公衆衛生雑誌	53 (10)	671-680	2006
内田勇人, 朝井由香里, 藤原佳典, 他	地域在住高齢者における車両スピード認知と身体能力との関係	厚生 の 指 標	53 (10)	7-12	2006
吉田祐子, 熊谷修, 岩佐一, 他	地域在住高齢者における運動習慣の定着に関連する要因	老年社会科学	28	348-358	2006
藤原佳典, 天野秀紀, 吉田裕人, 他	在宅自立高齢者の介護保険認定に関連する身体・心理的要因. 3年4ヶ月間の追跡調査から	日本公衆衛生雑誌	53	77-99	2006
藤原佳典	高齢者によるボランティア活動の意義と心身の健康に及ぼす影響—productivityとしての理論から実践的課題へ—	秋田県公衆衛生雑誌	4 (1)	12-20	2006
新開省二	閉じこもり予防	総合リハビリテーション	34	1041-1045	2006
新開省二	現場で役立つ調査方法—特に活動の評価をめぐって	福島県保健衛生情報	15(2)	20-24	2006
Fujita K, Fujiwara Y, Chaves PHM, et al.	Frequency of going outdoors as a good predictors for incident disability of physical function as well as disability recovery in community-dwelling older adults in rural Japan	J Epidemiology	16(6)	261-270	2006
Kwon J, Suzuki T, Kumagai S, et al.	Risk factors for dietary variety decline among Japanese elderly in a rural community: a 8-year follow-up study from TMIG-LISA	Eur J Clin Nutr	60	305-311	2006
Ishizaki T, Yoshida H, Suzuki T, et al.	Effects of cognitive function on functional decline among community-dwelling non-disabled older Japanese	Arch Gerontol Geriatr	42	47-58	2006
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス—高齢者による学校支援ボランティア「りぶりんと」の現場から(1)	公衆衛生情報	36 (5)	20-23	2006

著者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス－高齢者による学校支援ボランティア「りぷりんと」の現場から(2)	公衆衛生情報	36(6)	30-33	2006
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス－高齢者による学校支援ボランティア「りぷりんと」の現場から(3)	公衆衛生情報	36(7)	24-27	2006
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス－高齢者による学校支援ボランティア「りぷりんと」の現場から(4)	公衆衛生情報	36(8)	22-25	2006
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス－高齢者による学校支援ボランティア「りぷりんと」の現場から(5)	公衆衛生情報	36(9)	22-25	2006
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス－高齢者による学校支援ボランティア「りぷりんと」の現場から(6)	公衆衛生情報	36(10)	24-27	2006
藤原佳典	団塊・シニアボランティアのエビデンス－高齢者による学校支援ボランティア「りぷりんと」の現場から(7)	公衆衛生情報	36(12)	18-21	2006
藤原佳典	公衆衛生人が選ぶ私の一冊－アメリカの団塊世代対策の本でライブワークを発掘	公衆衛生情報	35(11)	14	2005
藤原佳典, 天野秀紀, 吉田裕人, 他	在宅自立高齢者の介護保険認定に関連する身体・心理的要因. 3年4ヶ月間の追跡研究から	日本公衆衛生雑誌	53	77-91.	2006
藤原佳典, 杉原陽子, 新聞省二	ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響－地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義－	日本公衆衛生雑誌	52	293-307	2005
新聞省二	介護予防チェックリスト	公衆衛生	69	630-633	2005
新聞省二, 藤田幸司, 藤原佳典, 他	地域高齢者における「タイプ別」閉じこもりの出現頻度とその特徴	日本公衆衛生雑誌	52	443-455	2005
新聞省二, 藤田幸司, 藤原佳典, 他	地域高齢者におけるタイプ別閉じこもりの予後. 2年間の追跡研究	日本公衆衛生雑誌	52	627-638	2005
新聞省二, 藤田幸司, 藤原佳典, 他	地域高齢者におけるタイプ別閉じこもり発生の予測因子. 2年間の追跡研究から	日本公衆衛生雑誌	52	874-885	2005
藤原佳典, 天野秀紀, 熊谷修, 他	在宅自立高齢者の介護保険認定に関連する身体・心理的要因-3年4ヶ月間の追跡研究から-	日本公衆衛生雑誌	53	77-91	2005
Fujiwara Y, Chaves P, Takahashi R, et al.	Arterial pulse wave velocity as a marker of poor cognitive function	J Gerontol Med Sci	60	607-612	2005
Lee Y, Shinkai S.	Correlates of cognitive impairment and depressive symptoms among older adults in Korea and Japan	Int J Geriatr Psychol	20	576-586	2005
藤田幸司, 藤原佳典, 熊谷修, 他	地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴	日本公衆衛生雑誌	51	168-180	2004
金貞任, 新聞省二, 熊谷修, 他	地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因－埼玉県鳩山町の調査から－	日本公衆衛生雑誌	51	322-334	2004

<書籍など>

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社	出版地	出版年	ページ
新開省二	余暇・趣味と長寿		健康長寿と運動	長寿科学振興財団	東京	2006	21-30
新開省二	第4章 定期的な身体活動が生理システムへの加齢変化に与える影響	柴田博, 新開省二, 青柳幸利監訳.	シエパード老年学	大修館書店	東京	2005	107-150
藤原佳典	第5章 身体活動と循環器および呼吸器系疾患	柴田博, 新開省二, 青柳幸利監訳.	シエパード老年学	大修館書店	東京	2005	153-181



### Ⅲ. 研究成果の刊行物・別刷

010-024

中高年者の社会参加の増進に向けた介入研究—  
2年間の介入事業による社会活動性の変化

○新開 省二<sup>1)</sup>、藤原 佳典<sup>1)</sup>、熊谷 修<sup>2)</sup>、天野 秀  
紀<sup>1)</sup>、吉田 裕人<sup>1)</sup>、渡辺 直紀<sup>1)</sup>

東京都老人総合研究所 社会参加とヘルスプロモーション研究チーム<sup>1)</sup>、人間総合科学大学 人間科学部健康栄養学科<sup>2)</sup>

【目的】平成 14 年度より埼玉県鳩山町を研究地域として、地域福祉への住民参加を促し、それを通じて中高年者の社会活動性を増進する介入事業を展開してきた。本研究ではこれまでの 2 年間の介入事業のアウトカム評価を行った。

【方法】平成 14 年度の初回調査から 2 年後、第二回社会活動性調査を実施した。同町在住の 55 歳から 81 歳の中高年者の 1/3 無作為抽出サンプル 1,818 人を対象として郵送式自記式質問紙法により行い、1,218 人から回答があった(応答率 67.0%)。橋本らの社会活動性指標を用いて、仕事、個人活動、社会・奉仕活動および学習活動の 4 側面の活動状況を調べ、各側面の活動性を介入地域(同町ニュータウン)と対照地域(同町本村)との間で比較した。なお、初回調査以後 2 年間に行った介入事業は、地域福祉ボランティアの養成事業、住民参加型の介護予防教室、地域福祉ボランティアの研修、一般住民向けの講演会、である。〈鳩山町の概況〉首都 50km 圏内にある総面積 25.71km<sup>2</sup>、人口 17,008 人、高齢者人口割合 14.0%の町(2000 年国勢調査)。かつては純農村であったが、1970 年代以降宅地開発が進み、ニュータウン(NT)が形成された。NT の人口は現在では同町人口の約 6 割を占めており、そのほとんどが首都圏通勤者(退職者)とその家族である。よって、同町は職業、家族構成、ライフスタイル、地域共生意識などの点で大きく異なる NT 地域と本村地域の二つから成る。NT では少子高齢化、核家族化が急速に進行しており、一人暮らしや夫婦二人の高齢者世帯が急増している。他方、NT における近隣等の人間関係は相対的に希薄であり、今後高齢者問題がより深刻化することが懸念されている。同町と当研究所は平成 12 年度『鳩山ニュータウン高齢社会対応の地域健康づくり事業』(覚書)を交わし、中高年者の健康調査を行いその結果を踏まえ地域福祉事業を共同で推進していくことに合意した。

【結果】介入地域(NT)では対照地域(本村)に比べ、55 歳から 64 歳の比較的若い年齢層において、社会・奉仕活動、学習活動が増進していた。一方、仕事や個人活動といった、いわゆる介入事業とは関連の少ない社会活動性は、初回調査と同様な年齢差および地域差がみられた。

【まとめ】過去 2 年間、中高年者の地域福祉への社会参加を促す介入事業を展開した結果、介入地域の比較的若い中高年者において社会・奉仕活動、学習活動という 2 つの側面の社会活動性が増進した。(東京都老人総合研究所特別プロジェクト「中年からの老化予防」および厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031 として実施した)

P2P II 01

## 2 年間の追跡研究による中高年者の 社会活動性の変化に関連する要因

李 相侖<sup>1)</sup>, 新開省二<sup>1)</sup>, 藤原佳典<sup>1)</sup>, 吉田裕人<sup>1)</sup>, 金 貞任<sup>2)</sup>, 鈴木隆雄<sup>3)</sup>

1) 東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

2) 東京福祉大学大学院社会福祉研究科, 3) 東京都老人総合研究所

【目的】埼玉県鳩山町を研究地域として, 地域福祉への住民参加を促し, 中高年者の社会活動性の増進を目指した介入事業を展開している. 当地域にて 2 年の間隔をおいて, 2 回の社会活動調査を実施した. 本調査はこれを用いて, 個人活動, 社会・奉仕活動, 学習活動の 3 つの領域における変化及びその関連要因を分析し, 今後の介入研究に活用することを目的とした.

【対象・方法】1. 対象地域: 埼玉県鳩山町では 70 年代以降宅地開発が進み, 町内に鳩山ニュータウン<以下, NT>が形成された. 居住者の半数が首都圏通勤者(退職者)とその家族である. 2. ①第 1 回目調査: 平成 14 年 1 月 1 日の現在, 55~79 歳であった住民 4,762 名のうち, 選挙人名簿から 1/3 の割合で無作為抽出された 1,568 名を対象にし, 郵送式自記式質問式調査を行った. ②介入事業: 略 ③第 2 回目調査: 第 1 回目調査の回答者 1,011 名のうち, 転出・死亡等で住民票がなくなった 94 名を除き, かつ, 新たに 55 歳以上になった人(転入者も含む)から 1/3 の割合で抽出した. 3. 項目: 社会活動指標(橋本ら 1997: 個人 0~10 点, 社会・奉仕 0~6 点, 学習活動 0~4 点, 就労有無), 居住地域(本村, NT), 総合的移動能力, 健康度自己評価, 情緒的サポート(0~5), 手段的サポート(0~3), 社会活動継続意志(3 件法: 活動を縮小/やめたい~より多くの活動に参加したい), 地域共生意識(5 項目 5~25 点:  $\alpha = .738$ ), 居住期間等. 4. 分析方法: 『生活自立の状態にある中高齢者における社会参加』に焦点をあてたため, 2 回の調査両方とも回答した 784 名(1 回目回答者の 77.5%)のうち, 1 回目

調査で総合的移動能力のレベル 1(遠出可能), レベル 2(近隣外出可能)である 756 名を分析対象とした. 社会活動指標の就労を除く 3 つの領域において, 活動性の変化した群<以下, 変化あり群>と変化しなかった群<以下, 変化なし群>に分け, 1 回目調査時の諸特徴を比較した( $t$ 検定,  $\chi^2$ 検定, Wilcoxon の順位和検定). 次に, 領域別に, 変化なし群を基準カテゴリーとした多項ロジスティック回帰分析を行った( $p < .1$ ).

【結果】1. 社会活動性の変化あり群の特徴: 個人活動領域では, 年齢が高く( $p < .006$ ), 健康度自己評価が低かった( $p < .006$ ). 社会・奉仕活動領域では, 健康度自己評価が高く( $p < .045$ ), 情緒的サポートが多く( $p < .028$ ), 地域共生意識( $p < .000$ )が高かった. 学習活動では, 総合的移動能力や健康度自己評価が低く( $p < .049$ ,  $p < .048$ ), 地域共生意識( $p < .000$ )が高かった. 多項ロジスティックの結果, 変化なし群に対する上昇群の予知因子は, 個人活動では年齢, 暮らし向きと健康度自己評価, 社会・奉仕活動では地域共生意識と社会活動継続意志, 学習活動では学歴, 地域共生意識であった.

【結論】2 年間の追跡研究の結果, 社会活動性領域別に, 活動性の変化に関連する要因が異なることが明らかになった. 地域中高年者の社会活動性を増進するためには, 健康度自己評価の改善とともに, 地域共生意識の向上が重要であることが示唆された.(本研究は, 東京都老人総合研究所特別プロジェクト及び長寿科学総合研究事業(H16-長寿-031)の助成より実施した)

PP208

## 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS”

## — 1. デザインと評価 —

藤原佳典<sup>1)</sup>, 西真理子<sup>1)</sup>, 渡辺直紀<sup>1)</sup>, 吉田裕人<sup>1)</sup>, 井上かず子<sup>2)</sup>, 天野秀紀<sup>1)</sup>  
熊谷 修<sup>1)</sup>, 内藤隆宏<sup>3)</sup>, 内田勇人<sup>4)</sup>, 佐久間尚子<sup>5)</sup>, 石井賢二<sup>6)</sup>, 新開省二<sup>1)</sup>

1) 東京都老人総合研究所地域保健研究グループ, 2) 東京大学大学院医学系研究科

3) 東京医科歯科大学大学院, 4) 兵庫県立大学環境人間学部, 5) 東京都老人総合研究所言語認知/脳機能研究グループ

6) 東京都老人総合研究所ポジトロン医学研究グループ

【背景・目的】近年, 高齢者によるレクリエーションやボランティア活動を通じた「生きがいづくり」が注目され, 多彩なプログラムが展開されている。しかし, 高齢者の社会活動の有効性や科学的根拠に基づいた活動プログラムについては未だ十分に検証されていない。我々はこれまで地域高齢者の追跡研究を通じて, サクセスフル・エイジングの条件といえる, 高次生活機能の中でも社会的役割や知的能動性に関わる能力の低下が手段的自立を阻害する予知因子であることを報告した。そこで, 社会的役割と知的能動性を継続的に要求する知的ボランティア活動—子供への絵本の読み聞かせ—による世代間交流型介入研究 (REPRINTS) を開始した。本編ではその研究デザインと評価の視点を紹介する。

【方法】対象地域は都心部 (東京都中央区, 27 人), 住宅地 (川崎市多摩区, 22 人), 地方小都市 (滋賀県長浜市, 21 人) を選び, 平成 16 年 6 月一般公募で集まった 60 歳以上介入群 (計 70 人) にまずベースライン健診 (心と生活のアンケート, 認知機能検査, 体力測定, 一部に脳画像検査など) を行った。同年 7 月から 3 ヶ月間 (週 1 回 2 時間) のボランティア養成セミナーを開講した。セミナー後半から 6~10 人単位のグループワークに移行し, 同年 10 月以降, 順次, 受け入れ施設への訪問を開始した (平成 17 年 1 月末現在, 11 人が脱退し, 継続者 59 人が計 6 小学校, 3 幼稚園, 3 学童クラブを 1 回/1~2 週間訪問中)。[読み聞かせの活動・実演例] 幼稚園児 1 クラス (20 人程度) を前に実演する場合は, グループ全体で約 30 分担当し, 手遊びから始まり, 一人 1 冊ずつ計 3, 4 冊読み聞かせる。なお, 実演の前後

にはグループごとに絵本選び, 読み合わせ, 反省会を行っている。

対照群は各地域それぞれ, 趣味・健康教室参加者やシルバー人材登録者から募集した (計 70 人)。

【結果】ベースライン健診における介入・対照両群の特徴を以下に示す。三地域による主効果については Bonferroni の補正を行い  $p < 0.017$  の場合を有意差ありと判定した。年齢では両群に有意差はなかった ( $68.2 \pm 6.0$  vs.  $68.8 \pm 4.8$  歳,  $p = 0.414$ ) が, 中央区の介入群は川崎市のそれに比べ高年齢であった ( $70.2 \pm 6.8$  vs.  $65.4 \pm 4.5$  歳,  $p = 0.002$ )。性別では両群に有意差はなかった (男  $22.9\%$  vs.  $31.4\%$ ,  $p = 0.342$ ) が中央区の対照群は川崎市, 長浜市のそれに比べて有意に男性が少なかった ( $3.4\%$  vs.  $56.5\%$  vs.  $44.4\%$ , それぞれ  $p < 0.001$ )。老研式活動能力指標総得点で 13 点満点の者の割合は両群に有意差はなく ( $55.7\%$  vs.  $67.1\%$ ,  $p = 0.224$ )。各群内で地域差もなかった。いきいき社会活動チェック表の社会参加・奉仕, 個人, 学習活動および仕事の各得点および, 認知・心理機能検査ではリバミード行動記憶検査の物語の記憶 (遅延再生) と WAIS-R 簡略版 (知識), GDS 短縮版, Rosenberg の自尊心尺度, 鎌原らの Locus of control において両群に有意差はなかった。

継続者, 脱退者ともいきいき社会活動チェック表の社会参加・奉仕, WAIS-R 簡略版 (知識) の得点は標準以上であったが, 継続者は脱退者に比べて有意に高得点であった。

(本研究は平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031 の助成により実施した)

# 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”

## —— 2. ボランティア養成セミナーの効果 ——

西真理子<sup>1)</sup>, 藤原佳典<sup>1)</sup>, 渡辺直紀<sup>1)</sup>, 吉田裕人<sup>1)</sup>, 井上かず子<sup>2)</sup>, 新開省二<sup>1)</sup>

1) 東京都老人総合研究所地域保健研究グループ, 2) 東京大学大学院医学系研究科

【はじめに】「REPRINTS」の基本コンセプトは高齢者の社会貢献, グループ活動, 生涯学習を通じ, 「社会的役割」と「知的能動性」を維持しようとするものである。「REPRINTS」のプログラムにおける第一段階であるボランティア養成セミナーは高齢者同士のグループ活動を通じて, 絵本や子供の世界を探求する生涯学習の場として位置づけられる。

【目的】ボランティア養成セミナーがボランティア活動志願者(受講者)におよぼす心理的効果を明らかにすること。

【方法】対象は, 2004年6月に実施したベースライン健診を受診した「REPRINTS」ボランティア活動の志願者70人(東京都中央区27人; 川崎市多摩区22人; 滋賀県長浜市21人)のうち, セミナー修了後(2004年10月)実施した中間評価アンケートに回答した59人である。ベースライン健診と中間評価の両アンケートとも, 尋ねた心理尺度は, ①抑うつ傾向尺度(GDS短縮版), ②Rosenbergの自尊心尺度, ③自己効力感尺度(Shererの尺度を一部改変), ④A型傾向判別表(前田が作成), ⑤Locus of Control (LOC) 尺度(鎌原らが作成)である。ベースライン健診と中間評価における各尺度の得点変化をWilcoxonの符号順位検定または対応のあるt検定を用いて評価した。

【結果】Rosenbergの自尊心尺度(得点が高いほど自尊心が高い)ではセミナー修了時点での得点が有意に高く(平均±SD: 4.0±1.6 vs. 4.1±1.5,  $p = 0.044$ ), 自尊感情が高まったことが示された。

自己効力感尺度(得点が高いほど自己効力感が低い)ではセミナー修了時点での得点が有意に低く(平均±SD: 18.0±4.0 vs. 16.7±4.3,  $p = 0.002$ ), 自己効力感が向上したことが示された。LOC尺度(得点が高いほどInternal傾向が強い)では, セミナー修了時点での得点が有意に高く(49.6±6.5 vs. 51.0±7.4,  $p = 0.021$ ), セミナー開始時点よりもInternal傾向が強まったことを示された。GDSでは終了後に改善傾向が見られた(3.4±2.4 vs. 3.0±2.4,  $p = 0.089$ ) が, A型傾向判別表では有意差はみられなかった(9.1±3.8 vs. 9.8±4.1,  $p = 0.139$ )。

【考察】心理尺度のうち特に自尊・自信に関わる3尺度でセミナー前後に有意な改善が見られた。本セミナーは3ヶ月間(週1回2時間)継続され, そのプログラムは絵本の専門家や図書館司書等による「講義」「読み聞かせの実技指導」「絵本の選定・吟味・読み合わせに関するグループワーク」「活動施設の見学」の4つの項目から構成された。さらに, 受講者の学習活動報告より, セミナー後半ではボランティア実践活動(デビュー)に向けて, セミナー時間外での個人またはグループでの自主的学習および練習時間が増したことが示唆された。セミナー受講を通して知的能動性が喚起されるとともに生涯学習への自信や達成感が生じたことが得点の変化として現れたと考えられる。

(本研究は平成17年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031 の助成により実施した)

PP210

## 都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”

## — 3. KJ法による活動の質的評価 —

井上かず子<sup>1)</sup>, 藤原佳典<sup>2)</sup>, 西真理子<sup>2)</sup>, 渡辺直紀<sup>2)</sup>,  
吉田裕人<sup>2)</sup>, 甲斐一郎<sup>3)</sup>, 新開省二<sup>2)</sup>

1) 東京大学大学院医学系研究科国際保健学科, 2) 東京都老人総合研究所, 3) 東京大学大学院医学系研究科

## 【目的】

「REPRINTS」の基本コンセプトは高齢者の社会貢献, グループ活動, 生涯学習を通じ, 「社会的役割」と「知的能動性」を維持しようとするものである。これらのねらいが9ヶ月間の活動を通して達成しえたかどうかをボランティア自身が語る言葉により質的に評価することを目的としている。

## 【対象と方法】

川崎市多摩区在住の「REPRINTS」ボランティア(平成17年1月末時点, 活動を継続中の18名)のうち, 2月・定例ミーティングに出席した12名(男性3名, 女性9名, 平均年齢64.5歳)に対し, 9ヶ月間(ボランティア養成セミナー3ヶ月+読み聞かせボランティア実践活動6ヶ月)の活動を振り返る意見交換の場を設けた。各ボランティアからの感想はKJ法により集約・分析された。感想の主題は「本ボランティア活動にかかわって変化したこと」であるが, 実際に感想を記述する際にはこの主題をさらに具体的に, ボランティア活動により1)気づいたこと, 2)伸びたこと, 3)楽しかったこと, 4)その他, の4副題に大別し, それらについて自由に記述させた。ボランティア自身が記述した紙片をそれぞれ最も関連があると思った副題の下へ貼付けた後, 進行役スタッフが紙片の内容によりさらに紙片群を再編した。

## 【結果と考察】

4副題について記入された紙片は, 計68枚であった。紙片の内容を検討して再分類を行った結果, まず以下の7項目にまとめられた。①「健康」②「家族」③「絵本」④「友人・地域とのつながり」

⑤「他人との交流」⑥「子どもとのふれあい」⑦「自分たちの子供時代の回想」であった。項目別の紙片の枚数は, ⑤「他人との交流」が17枚で最も多かった。「声が大きくなった」との内容は注視しうる。これは, 養成セミナーをはじめ, グループ内練習や個人の日常的な発声練習による成果と考えられる。声を大きく出せるようになった結果, 「人前に出ることが苦にならなくなった」, 「見知らぬ人に気さくに声をかけることができるようになった」という感想が聞かれた。さらに⑤に, 周囲との関わりという点で類似する④「友人・地域とのつながり」(8枚)と⑥「子どもとのふれあい」(10枚)の枚数を加えると計35枚になり, 全体の半数を超えた。これら④, ⑤, ⑥の3項目は総じて高齢者の世代間交流を含む『社会活動性の活性化』と集約できる。次に③「絵本」(21枚)についての紙片が多く, その内容からは「絵本」とおして, 絵や文章から得られる感動, 絵本についての学習, クライアントである子供の心理を理解しようと努力する姿勢がうかがわれた。また, 子供にとって望ましい絵本を探求し書店や図書館に頻繁に通うことが, ボランティアにとっての新たな日常活動の一つとして加わった。生涯学習による『知的能動性の高まり』と集約できる。

【結論】ボランティアの感想の質的評価から「REPRINTS」により「社会的役割」と「知的能動性」が維持・向上できる可能性が示唆された。(本研究は平成17年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業H16-長寿-031の助成により実施した)

P03-030

都市部高齢者の社会貢献型世代間交流プログラム “REPRINTS” -1. デザインと概要-

○藤原 佳典<sup>1)</sup>、渡辺 直紀<sup>1)</sup>、西 真理子<sup>1)</sup>、吉田裕人<sup>1)</sup>、井上 かず子<sup>1,2)</sup>、李 相侖<sup>1)</sup>、佐久間 尚子<sup>7)</sup>、石井 賢二<sup>8)</sup>、内田 勇人<sup>3)</sup>、明石 圭子<sup>4)</sup>、武田順子<sup>5)</sup>、天野 秀紀<sup>1,6)</sup>、西川 武志<sup>6)</sup>、角野 文彦<sup>9)</sup>、新開 省二<sup>1)</sup>

東京都老人総合研究所 地域保健研究グループ<sup>1)</sup>、東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻<sup>2)</sup>、兵庫県立大学 環境人間学部<sup>3)</sup>、川崎市多摩区保健福祉センター<sup>4)</sup>、長浜市健康推進課<sup>5)</sup>、北海道教育大学教育学部<sup>6)</sup>、東京都老人総合研究所 言語認知脳機能研究グループ<sup>7)</sup>、東京都老人総合研究所 ポジトロン研究施設<sup>8)</sup>、滋賀県長浜保健所<sup>9)</sup>

【目的】高齢者の社会活動の有効性や科学的根拠に基づいた活動プログラムは未だ十分に検証されていない。高齢者の高次生活機能である社会的役割と知的能動性を継続的に要求しつつ、多世代との地域共生をはかる知的ボランティア活動—子供への絵本の読み聞かせ—による世代間交流型介入研究 (REPRINTS) を開始した。本編ではその研究デザインと評価の視点を紹介する。

【方法】対象地域は都心部 (東京都中央区)、住宅地 (川崎市多摩区)、地方小都市 (滋賀県長浜市) を選び、平成 16 年 6 月一般公募で集まった 60 歳以上介入群 (計 70 人) にベースライン健診 (心と生活のアンケート、認知機能検査、体力測定、一部に脳画像検査など) を行った。同 7 月から 3 ヶ月間 (週 1 回 2 時間) のボランティア養成セミナーを開講し、10 月以降、受け入れ施設への訪問を開始した (平成 17 年 1 月末現在、11 人が脱退し、継続者 59 人が計 6 小学校、3 幼稚園、3 学童クラブを 1 回/1~2 週間訪問中)。[読み聞かせの活動・実演例] 幼稚園児 1 クラス (20 人程度) を前に実演する場合は、グループ全体で約 30 分担当し、一人 1 冊ずつ計 3, 4 冊読み聞かせる。実演前後にはグループごとに勉強会や反省会を行う。対照群は各地域それぞれ、趣味・健康教室参加者等から募集した (計 70 人)。継続者に対し第二回健診を実施した (平成 17 年 3 月末)。

【結果とまとめ】ベースライン健診における介入・対照両群の年齢 ( $68.2 \pm 6.0$  vs.  $68.8 \pm 4.8$  歳、 $p=0.414$ )、性 (男 22.9% vs. 31.4%、 $p=0.342$ ) に有意差はなかった。老研式活動能力指標、認知・心理機能検査 [記憶 (遅延再生)、知識、抑うつ、自尊心尺度、Locus of control] において両群に有意差はなかった。第二回健診において老研式活動能力指標総得点 ( $12.3$  vs.  $12.6$  点、 $p=0.045$ )、最大歩行速度 ( $120.2$  vs.  $129.3$  m/sec、 $p=0.018$ ) は有意に改善し、Locus of control ( $46.9 \pm 7.4$  vs.  $50.1 \pm 7.3$  点、 $p=0.002$ ) で internal 傾向が強まった。今後は対照群と比較しながらボランティアへの直接的な介入効果を追跡・評価していくとともに、児童、保護者、教職員へのアンケート等を通じて本事業の波及効果も評価したい。

(本研究は平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031 の助成により実施した)

## 都市部高齢者の社会貢献型世代交流プログラム “REPRINTS”-2. 社会活動性全体との関連-

○李 相侖<sup>1)</sup>、藤原 佳典<sup>1)</sup>、渡辺 直紀<sup>1)</sup>、西 真理子<sup>1)</sup>、吉田 裕人<sup>1)</sup>、井上 かず子<sup>1,2)</sup>、佐久間 尚子<sup>3)</sup>、呉田 陽一<sup>3)</sup>、天野 秀紀<sup>1)</sup>、内田 勇人<sup>4)</sup>、新開 省二<sup>1)</sup>

東京都老人総合研究所 地域保健研究グループ<sup>1)</sup>、東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻<sup>2)</sup>、東京都老人総合研究所 言語認知脳機能研究グループ<sup>3)</sup>、兵庫県立大学 環境人間学<sup>4)</sup>

【目的】高齢者の心身の健康維持・向上にとって望ましい社会参加プログラムを提案する際には、臓器別対応の「医療型モデル」よりもむしろ高齢者の生活そのものを活性化する「生活モデル」型介入を提案したい。本研究では、知的ボランティア活動—子供への絵本の読み聞かせ—による世代間交流型介入研究（以下、“REPRINTS”）の参加者を対象に、本ボランティア活動が高齢者の社会活動全般つまり生活全体におよぼす影響についてしらべることを目的とする。

### 【方法】

対象：平成16年6月一般公募で集まった60歳以上の70名をボランティア参加群とし、ベースライン健診（T1）を行なった。ボランティア養成セミナーと学校・幼稚園での読み聞かせ活動を開始・継続後に平成17年4月第二回健診（T2）を行なった（平成17年3月末現在、継続者59名）。

分析項目：社会活動性—本研究での社会活動とは「家庭外での対人活動」と定義し、高齢者における社会活動を特定する為に開発された『いきいき社会活動チェック表』を用いた。仕事以外の3つの側面である、「個人活動」、「社会参加・奉仕活動」、「学習活動」を4件法で尋ねた。各項目で、「よく（時々）する」を1点、「ほとんどしない（やめた）」を0点とし、合計得点を算出した。各々、10項目（0～10点）、7項目（0～7点）、4項目（0～4点）である。

分析方法：T1とT2での上記3側面の得点の変化をwilcoxonの符号付き順位検定を用いて評価した。

【結果】T1-T2間で、「個人活動」（8.94±1.92vs. 9.33±1.61；p=0.042）、「社会参加・奉仕活動」（3.04±1.64vs. 3.51±1.73；p=0.032）、「学習活動」（1.61±0.87vs. 1.90±1.06；p=0.030）の3側面ともに得点は有意に上昇した。

【考察】“REPRINTS”は、高齢者による社会貢献、生涯学習およびグループ活動を基本コンセプトとしている。本分析の結果、“REPRINTS”活動を開始した結果、『いきいき社会活動チェック表』におけるボランティア活動と直接関連のある「社会参加・奉仕活動」のみならず、「個人活動」および「学習活動」にも影響を与えることが示された。“REPRINTS”活動は、高齢者の社会活動全般つまり生活全体を多面的に活性化することに寄与した可能性が示唆される。今後、対照群との比較を行いつつ、社会活動性全般の変化と健康への影響を追跡する予定である。

（本研究は平成17年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031 の助成により実施した）

## 都市型高齢者の社会貢献型世代間交流プログラム “REPRINTS”-3. 健康政策的意義-

○明石 圭子<sup>1)</sup>、角野 文彦<sup>2)</sup>、藤原 佳典<sup>3)</sup>、松山 悦子<sup>1)</sup>、馬場 富幸<sup>1)</sup>、新開 省二<sup>3)</sup>、清水 厚子<sup>1)</sup>

滋賀県 長浜市 健康福祉部 健康推進課<sup>1)</sup>、滋賀県長浜保健所<sup>2)</sup>、東京都老人総合研究所 地域保健研究グループ<sup>3)</sup>

【目的】長浜市が実施している「高齢者の元気づくり学校ボランティア事業“REPRINTS”（リプリント）ながはま」は、健康日本21地方計画である「健康ながはま21（平成16年1月策定）」にとって、身体活動・運動、心・休養、認知症対策の各分野の目標達成に寄与する事業として位置づけられている。その理由は、高齢者にとってボランティア活動が生きがいになるとともに日常の身体活動や知的活動を維持する働きがあること、またボランティアの受け手側にとって子育て支援の大きな力となることや日常的に世代間交流が実現される等多くの効果が期待されるからである。そこで、ヘルスプロモーション実践のための展開モデルといわれるMIDORIモデルを用いて、本事業が実際の計画推進に与える影響について検討した。

【方法】長浜市における「REPRINTS・ながはま」の全プロセスと「健康ながはま21」の目標や評価指標をMIDORIモデルにあてはめ、第1段階から第9段階までの診断・評価を行った。

【結果】第1段階から第6段階については特に問題はなかった。第7段階の経過評価においては種々の検討課題が見つかったが、それ以上に得たことが多かった。まず、事業の遂行のために教育委員会、現場の学校や留守家庭児童会、図書館、PTAの読み聞かせサークル等の教育関係者と日常的に交流が持てたこと。アンケート実施において意見の相違もあったが、そのおかげで議論を重ねることができ、結果的に本音でやりとりができる関係が持てた。また参加した高齢者が一生涯懸命に子供たちに読み聞かせを行う過程の中で、教員やコーディネーター、保健センター職員等の関係者が多くの感動や感銘を受けたこと。数多くの人に高齢者は尊敬すべき人といった思いを抱かせられた。また子ども達が、通学・帰宅途中で高齢者に出会うと声をかけて挨拶をするようになったこと。安心できる顔見知りの大人が地域に増えたことが実感できた。第9段階の結果評価においては、まだ、事業実施の初年度であるため健康指標に変化を与えるだけの参加者数に至っていないことがわかった。

【考察】健康指標に影響を与えるためには、事業を継続的に実施して参加者数を増やす必要があることと長期的な展開として絵本の読み聞かせに興味のない高齢者に対して多様なボランティアプログラムを提案できるかの検討が必要である。



P2A I 06

## 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”から

— 児童の高齢者イメージに及ぼす短期的影響 —

渡辺直紀, 藤原佳典, 西真理子, 吉田裕人, 李相侖, 新開省二

東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

【目的】2004年10月, 小学校等を訪問し児童に絵本の読み聞かせを行う高齢者ボランティアプログラム“REPRINTS”を開始した。開始時点での児童の高齢者イメージは, 祖父母等との交流経験が多いほど肯定的で, 高学年ほど否定的になる傾向があった。本研究では, “REPRINTS”が約半年間の活動により児童の高齢者イメージにどのような影響を及ぼしたのかを明らかにする。

【対象・方法】川崎市多摩区 A 小学校 (郊外住宅地)・東京都中央区 B 小学校 (都心) 2~6 年生児童 (A 校 398 名, B 校 113 名) に対し, 各校において初回調査の約半年後に学級単位で集合自記式アンケートを行った。調査項目は, SD (Semantic Differential) 法による高齢者の情緒的イメージ尺度 (12 項目), 「おとしより」であると思う年齢, “REPRINTS”との交流頻度 (校外での挨拶・会話・読み聞かせ), 児童用社会的望ましさ尺度 (10 項目) である。SD 尺度は, 道徳性・倫理性を表す評価因子と力強さ・活発さを表す活動性・力量性因子から成る一次元の尺度であることが, 既に確認されている。

全員から有効回答を得られ, うち初回調査でも有効回答があった A 校 355 名, B 校 111 名を対象に下記分析を行った。(1) “REPRINTS”との交流の地域別基礎集計。(2) “REPRINTS”との交流の有無による SD 得点 (合計点・各因子得点及び初回調査時との得点差) の比較。(3) 性別, 学年, 地域, 祖父母との同居経験・交流経験, “REPRINTS”との交流頻度合計点 (各項目「いつも/よく」=3 点, 「時々」=2 点, 「しない・見かけず」=1 点の合計点:  $\alpha = .70$ ) を独立変数, 追跡調査での SD 得点 (合

計点・各因子得点: 高低二群に分割) および初回調査での SD 得点との差 (同: 0 以上/未満で二群に分割) を従属変数としたロジスティック回帰分析。

【結果と考察】(1) 校内での挨拶 (「よく・時々」: A 校 69.3%, B 校 80.1%)・校外での挨拶 (同 30.2%, 14.4%)・読み聞かせ (同 51.0%, 81.9%) については有意差があった ( $\chi^2$ 検定:  $p < .05$ )。会話 (同 50.0%, 58.5%) については有意差はなかった。(2) 追跡調査での SD 得点は, 交流がある群の方がほぼ全ての項目で有意に高かった (Wilcoxon の順位和検定:  $p < .05$ )。初回調査での SD 得点との差は, 読み聞かせのみ合計点・各因子得点の全てにおいて, 交流がある群の方が有意に正の方向に大きかった (同:  $p < .05$ )。(3) SD 得点合計点の高低には地域・学年及び交流頻度合計点が有意に寄与し ( $p < .01$  及び  $< .001$ ), B 校・低学年・交流頻度が多い児童ほどイメージが有意に肯定的であった。評価因子合計点もほぼ同様の傾向であったが, 活動性・力量性因子合計点には学年のみが有意に寄与していた ( $p < .01$ )。初回調査との得点差は, SD 得点合計点・評価因子合計点については地域のみが有意に寄与し ( $p < .01$ ), B 校の方が初回調査よりイメージが肯定的になる傾向があった。活動性・力量性因子合計点については有意に寄与する項目がなかった。

【結論】“REPRINTS”との交流頻度が高い児童ほど高齢者イメージが有意に肯定的であったが, 交流によって肯定的に変化したのか否か, 因果関係の解明は今後の課題である。(本研究は平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16・長寿・031 の助成により実施した。)

# 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS”

## — 2. KJ 法による第 1 期, 第 2 期ボランティアの比較 —

井上かず子<sup>1,3)</sup>, 藤原佳典<sup>1)</sup>, 西真理子<sup>1)</sup>, 李 相侖<sup>1)</sup>, 佐久間尚子<sup>2)</sup>  
渡辺直紀<sup>1)</sup>, 吉田裕人<sup>1)</sup>, 甲斐一郎<sup>3)</sup>, 新開省二<sup>1)</sup>

1) 東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

2) 東京都老人総合研究所自立促進と介護予防研究チーム, 3) 東京大学大学院医学系研究科

### 【目的】

昨年度, 第 1 期 REPRINTS ボランティア (第 1 期生と称す) 活動を, KJ 法による質的な分析を行った結果, 選択肢による質問票では得られなかったボランティアの直接的な声を知ることができ, プログラム評価の上で質問票による定量的な分析を補完するデータが得られた。今回, 第 1 期生に加え 2 期生 (2005 年 6 月より活動開始) についても前回と同様 KJ 法による質的分析を行ない, 1 期生については前回の結果と, 2 期生については 1 期生初回時の結果と, それぞれ比較した。

### 【対象と方法】

2006 年 2 月, 川崎市多摩区の定例会に出席した 1 期生 10 名, 2 期生 14 名に対し, REPRINTS 活動を振り返り, その感想を紙片に記述させた (無記名式)。紙片は前回と同様 KJ 法を用いて集約・分析した。主題は「本ボランティア活動にかかわって変化したこと」とし, 具体的に 1) 気づいたこと, 2) 伸びたこと, 3) 楽しかったこと, 4) その他, の 4 副題について尋ねた。

### 【結果】

① 1 期生: 4 副題について記入された紙片は計 59 枚であった。紙片の内容を検討して再分類を行った結果, 「絵本」(20 枚), 「同世代・異世代間の交流やサポート」(13 枚), 「子どもたちとの交流」(10 枚), 「上達」(6 枚), 「地域社会への関心」(5 枚), 「効果に期待」(2 枚), 「声」(2 枚), 「反省」(1 枚) といったキーワードで分類された。初回と同様な内容もあれば, 活動を 2 年間継続した時点で, はじめて見られる内容もあった。

② 2 期生: 82 枚の紙片を分類すると大きく 5 つの項目に分けられた。「絵本」(29 枚), 「日常生活および自分自身の変化」(18 枚), 「同世代・異世代間の交流」(17 枚), 「子どもとの交流」(11 枚), 「学校・子どもの現状」(7 枚) に分類された。

### 【考察】

① 1 期生: 「絵本」に関する感想は前回と同様最多であり, 絵本がボランティアの知的好奇心を継続的に高める題材として妥当と考えられた。第 2

位の「同世代・異世代間のネットワークやサポート」では, 今回は, ボランティアたちがグループ内のネットワーク形成からさらに相互にサポートし合う関係に発展してきていることがわかった。さらに“子どもだけでなくお年寄りの方にも読む機会があったのがよかった”という記述が見られ, ボランティアたちは読み聞かせ活動の経験を生かして地域の高齢者を支援する立場にもなり, 社会参加と productivity が一層高まったといえよう。「上達」, 「声」, 「効果に期待」, 「反省」に分類された項目は, いずれも 2 年目であるがゆえの昨年からの変化にかかわる感想といえる。ボランティアが前向きに活動に従事してきたという自負を読み取ることができる。

② 2 期生: 「絵本」が有する絵やストーリーのすばらしさに感銘を受けたという記述が最多であり, 1 期生の感想と同様であった。第 2 位の「日常生活および自分自身の変化」では, セミナー等で「訓練すること」によって, 一定の身体的・精神的な効果が得られ, 自分自身への自信につながったと考えられる。この点も, 昨年度 1 期生の結果と同様であった。高齢期になっても「訓練・練習すること」を積極的に行うことの有用性が示唆されたといえる。また, 「同世代・異世代間の交流」という内容に関しては, 1 期生の初回と同様に喜びや生きがいとなっていることがわかったが, 今回の 2 期生には「子どもとの交流」を通して, 喜びを得るだけでなく, 世代を超えて文化歴史を語り継ぐ役目を担う高齢者像もみることができた。

【結論】1, 2 期生を比較した結果から, 両者とも絵本を通して得られる知的好奇心の充足つまり生涯学習やセミナー等から得られる「心理的 well-being」の再現性や持続性が確認された。また, 人や地域とのネットワークの拡大や他者へのサポートは「社会貢献」や「グループ活動」を示唆し, REPRINTS のコンセプトが反映されている。(本研究は平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031 の助成により実施した)

P2P II 03

## 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS”

## — 1. ボランティア活動への満足度評価 —

藤原佳典<sup>1)</sup>, 西真理子<sup>1)</sup>, 李 相侖<sup>1)</sup>, 佐久間尚子<sup>2)</sup>, 渡辺直紀<sup>1)</sup>, 井上かず子<sup>1)</sup>  
 深谷太郎<sup>1)</sup>, 天野秀紀<sup>1)</sup>, 石井賢二<sup>3)</sup>, 内田勇人<sup>4)</sup>, 角野文彦<sup>5)</sup>, 新開省二<sup>1)</sup>

1) 東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

2) 東京都老人総合研究所自立促進と介護予防研究チーム, 3) 東京都老人総合研究所ポジトロン医学研究施設

4) 兵庫県立大学環境人間学部, 5) 東近江地域振興局

【目的】高齢者の高次生活機能である社会的役割と知的能動性を継続的に必要とする知的ボランティア活動—子供への絵本の読み聞かせ—による介入研究“REPRINTS”を展開している。“REPRINTS”プログラムの基本コンセプトは高齢者による「社会貢献」「生涯学習」「グループ活動」である。“REPRINTS”が、上記三コンセプトに準拠して円滑に継続しうるために、プログラムに対するボランティアの満足度を測定する尺度の開発を行なうこと。【方法】対象は都心部（東京都中央区）、住宅地（川崎市多摩区）、地方小都市（滋賀県長浜市）で公募された第1期ボランティア全55人（平成16年度セミナー修了・読み聞かせ活動開始10ヶ月後に実施）、第2期ボランティア全61人（平成17年度セミナー修了・読み聞かせ活動開始6ヶ月後に実施）の内、回答に欠損の無い97人。設問は「社会貢献」的側面：読み聞かせ訪問活動の①頻度、②1回あたりの時間、③内容・読みかせプログラム、④内容・読み聞かせ以外の交流プログラム、「生涯学習」的側面：⑤読み聞かせの上達度、⑥絵本選びについての習熟度、⑦絵本選び・練習に要す時間・労力、⑧子供や地域社会に対する再認識、「グループ活動」的側面：⑨活動グループ内のコミュニケーション、⑩自グループ以外のりぷりんとボランティアとのコミュニケーション、⑪老研・事務局スタッフとのコミュニケーション、⑫訪問先職員（教職員など）とのコミュニケーションについて5件法（とても満足・どちらかといえば満足・どちらでもない・どちらかといえば不満・とても不満）で尋ね、「とても満足」から「とても不満足」まで5点～1点（得点範囲5-60

点）を与えた。これら12項目について因子分析（主因子法・Promax回転）を行い、抽出された因子の下位尺度としての信頼性をCronbach's  $\alpha$ により算出した。【結果】第一因子として⑤⑥⑦⑧⑩が、第二因子として①②③④が、第三因子として⑨⑪⑫が抽出され、順に生涯学習因子、社会貢献因子、グループ活動因子と改称した（抽出後の累積負荷量平方和は53.2%）。満足度12項目の総得点、および上記三因子の各小計点の平均±SDは、それぞれ $42.7 \pm 7.4$ ,  $16.6 \pm 3.5$ ,  $14.7 \pm 3.3$ ,  $11.4 \pm 2.2$ であった。Cronbach's  $\alpha$ はそれぞれ0.87, 0.84, 0.80, 0.63であり、尺度としての信頼性が確認された。総得点および各因子の満点を分母とし、各満足度の平均点を分子とした場合の割合はそれぞれ、 $0.71$ ,  $0.66$ ,  $0.74$ ,  $0.76$ であった。【考察】“REPRINTS”では5～8人程度の活動グループ単位で施設を訪問する。ボランティアの意識では自グループ以外のボランティアとのコミュニケーションはグループ活動の対象というよりもむしろ合同会議、勉強会を通じての生涯学習の仲間と捉えられている可能性がある。上記三因子のなかでは生涯学習への満足度が劣る傾向があり、“REPRINTS”の題材である「絵本」を学習することの深遠さが示唆された。【結論】“REPRINTS”プログラムの満足度はそのコンセプトである「社会貢献」「生涯学習」「グループ活動」に準拠する3因子で評価しうることを示された。（本研究は平成17年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業H16-長寿-031の助成により実施した）

## 高齢者のボランティア活動と認知機能

—— 世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS” より ——

佐久間尚子<sup>1)</sup>, 呉田陽一<sup>2)</sup>, 伏見貴夫<sup>5)</sup>, 伊集院睦雄<sup>1)</sup>, 辰巳 格<sup>6)</sup>, 藤原佳典<sup>3)</sup>, 西真理子<sup>3)</sup>  
李 相侖<sup>3)</sup>, 渡辺直紀<sup>3)</sup>, 井上かず子<sup>3)</sup>, 吉田裕人<sup>3)</sup>, 石井賢二<sup>4)</sup>, 内田勇人<sup>7)</sup>, 新開省二<sup>5)</sup>

- 1) 東京都老人総合研究所自立促進と介護予防研究チーム, 2) 同・福祉と生活ケア研究チーム  
3) 同・社会参加とヘルスプロモーション研究チーム, 4) 同・ポジットロン研究施設  
5) 北里大学・医療衛生学部, 6) LD・Dyslexia センター, 7) 兵庫県立大学・環境人間学部

【目的】子供への絵本の読み聞かせボランティア活動を主とする社会貢献プログラム “REPRINTS” は、生涯学習、グループ活動、世代間交流を通して高齢者の健康と社会貢献を促す参加型の介入プログラムである。本研究の目的は “REPRINTS” の介入効果を認知機能の側面から検討することにある。本年は開始から2年目の認知機能評価の結果について報告する。

【方法】対象：都心部、住宅地、地方小都市の3地域において読み聞かせボランティアに志願した高齢者（介入群）と健診のみ受診する高齢者（対照群）の2群である。2004年から参加の1期生123名に対してはベースラインから9ヵ月後の2回目の評価を行ない、2005年から参加の2期生86名に対してはベースライン評価を行なった。評価方法：事前に配布する質問紙調査と健診会場の個室で検査者が行なう認知機能検査を実施した。質問紙調査：日常の認知活動の頻度と記憶力の自己評価、記憶手段、日本版 RBMT による生活健忘の頻度を調べた。認知機能検査：日本版 RBMT の「物語の記憶」の直後再生と遅延再生、日本版 WAIS-R の「知識」、「絵画完成」、「符号」、および音韻カテゴリと2つの意味カテゴリによる語想起3課題を実施した。2年目からは Trail Making Test を追加した。

【結果】途中辞退や群変更などが生じた対象者を除き分析した。介入群と対照群のベースラインの比較：1期2期を合わせた介入群119名（平均年齢67.5歳、平均教育年数13年）と対照群94名（平均年齢69.1歳、平均教育年数12年）の平均得点（粗点）はいずれも各検査の健常高齢者の基

準の平均値を上回り、参加者の認知能力は全体に高かった。年齢と教育年数に群、地域差がみられたので、年齢と教育年数を共変量とする共分散分析を行った。共変量の年齢は記憶と絵画、符号、語想起の1課題で有意であり、教育年数は記憶を除くすべての検査で有意であった。年齢と教育年数の影響を除いた後の主効果は、群、地域、期のいずれも有意ではなかった。検査セットの因子構造：10種の認知検査得点と年齢、教育年数を加えた12変数による因子分析を行なったところ、3因子が抽出された（累積寄与率51.6%）。プロマックス回転の結果、これらの3因子は「言語性因子」、「動作性因子」、「記憶因子」と考えられた。1期生の経年変化：1期生の2回目（9ヶ月後）のデータは介入群55名と対照群62名であり、これらのベースラインと2回目の成績を比較したところ、分散分析では2回目の成績が高い検査項目もみられたが、年齢と教育歴を共変量とする共分散分析では主効果、交互作用とも有意ではなかった。

【考察】1期2期を合わせたベースライン評価の結果、今回の参加者は全般に高い認知機能を持つ高齢者であることがわかった。1期生の2回のデータを基に予備的に介入効果を検討したところ、年齢や教育年数による差が大きく、群と回との交互作用は有意ではなかった。引き続き対象者数を増やし追跡回数を増やして得点の変動を調べると共に、年齢などを考慮した評価点による介入効果の分析を検討する予定である。

（本研究は平成17年度厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業 H16・長寿・031 の助成により実施した）